

2012 年度島根大学教育学部学部長裁量経費プロジェクト

アジアをフィールドとする学校教育体験を通した

教育観の相対化を図る教育体験活動

1 概要

教員を目指す教育学部の学生が、アジアの学校教育体験を通して、自らの教育観の相対化を図り、これからの教員に求められる「教師力」の向上に向けた主体的な学びの必要性を獲得する。

2 参加者

島根大学教育学部初等教育専攻 3・4 年生 8 名、 島根大学教育学部初等教育開発講座教員 3 名

3 日程

2012 年 11 月 25 日(日)から 30 日(金)

4 主な活動

(1) 現地学校訪問



歓迎してくださった学校の教員・生徒たちとプロジェクト参加者です。

生徒たちにも、こうした外部の来訪者との対応の経験を積ませることになっているそうです。



生徒たちが、学校について英語でプレゼンテーションを行ってくれました。

英語は、「道具」として使うために学んでいることを参加した学生たちも実感しているようでした。



学校側との意見交換を行う、引率教員と学生たち。

香港の教育における、「競争」の占める重要性について、参加学生たちは実感しているようでした。



小学部の英語の授業です。

あいさつといった日常的な場面だけでなく、違いを説明する、根拠を挙げて説明するといった場面での表現についての授業を口頭のみで行っていました。

小学校の教員になる参加学生には、日本の外国語活動との違いに、様々なことを考える機会となりました。



中学部の英語の授業です。

環境を守るために、生徒である自分たちに学校で、家庭で、社会で何ができるかをグループで考え、英語でプレゼンテーションするという内容でした。

ここでも、英語は「道具」として位置づけられていることを参加学生は強く認識していました。

(2) 日本人学校訪問



日本人学校小学部にて、日本人学校の制度や学校の概要のレクチャーを受けました。

日本人学校ならではのよさを生かし、課題を乗り越えるための配慮について実践的な話を聞くことができました。



小学部にある「国際学級」のフロアです。日本人以外の児童が、インターナショナルスクールとして日本人学校に通っています。



香港は地価が高いため、運動場を屋上に設置するそうです。

知識としては知っていても、実際に、訪れてみると香港の高層ビルの多さには参加学生の多くが驚いていました。



日本人学校中学部にて、理科の授業を見学しました。日本の学習指導要領に沿った内容が取り扱われています。

日本人学校の教員には、日本から派遣されてきた教員もいるため、日本との共通点も多くあるようです。



中学部の英語の授業です。習熟度によりクラスを分けて行っているそうです。

香港に来て間もない生徒や、香港での生活の長い生徒など、英語の能力が多様な中で、教員のみなさんは工夫した授業を行っています。



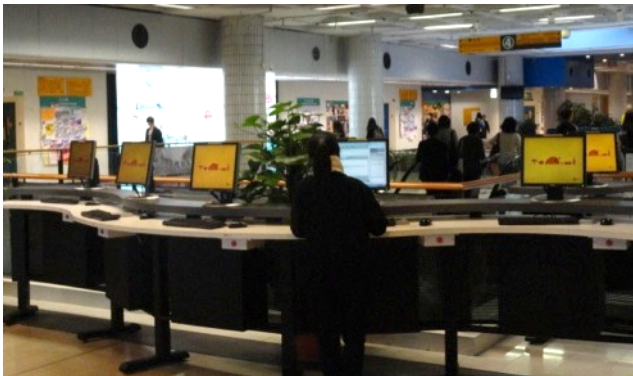
中学部の先生と、意見交換を行いました。

日本人学校には、日本の全国各地から教員が派遣されてきたり、現地で教員を採用したり、多様な職歴を持った教職員がいらっしゃるの、どのように学校として仕事のやり方を共通化するかなどの工夫も必要だそうです。

(3) 大学施設見学



香港中心部から少し離れたところにある、香港城市大学のキャンパスを見学しました。



使いやすいように、通路に設置されたコンピュータなど、あらゆるところにネットワークにアクセスできる環境が整っていました。



建物内では、小グループで討議しながら、学修が進められるようテーブルや椅子が配置されていました。

通りがかった学生が、そのグループの討議に参加する姿も見られました。

5 プロジェクトの成果

参加学生の中には、香港のみならず国外を訪れること自体が初めての学生も多くいました。学校教育体験のみならず、香港の滞在中を通して、社会における「競争」の意味について考える機会となったようです。学校でも、よりよい成績を目指すために「競う」ことを奨励していました。その他にも、参加学生にとっては、これまでの自らの教育観とは異なる教育観に基づく教育が行われていることに気づいたようです。

例えば、現地学校を訪問した時に、生徒たちが昼休みに学校を出て、近隣のファストフードなどで昼食を食べている姿を見かけました。それは、香港の学校ではよくあることだそうです。参加学生は、学校がどこまで生徒たちを統制するか、しないかの規準に大きな驚きを感じていました。

このような、教育には多様な考え方があり、それぞれの考え方に基づいた教育が展開されているということは、参加学生も、知識としては持っています。しかしながら、実際に展開されている教育を体験することによって、その意味を考え、自らの教育観を捉え直すきっかけになります。

一般的に、地元で教員になることを目指すことが多いことから、島根大学教育学部でも島根県や鳥取県出身の学生が多くを占めます。そうすると、学生集団がよい意味でも、悪い意味でも同質性が高くなってしまいう傾向にあります。同質性の高さは、自分たちのあり方を問いなおす「批判的思考」の妨げになることもあります。

そうした教育学部の学生たちにとって、単に英語の能力を高めるためだけでなく、文化の多様性やそれに基づく教育の多様性を知り、自らの教育観を相対化するための海外経験は非常に有効な機会となりました。

本プロジェクトは、優れた教育を行っている国や地域の考え方を無批判に受け入れることを目的としてはいません。異なる文化や価値観に触れることで、自らの教育観を問いなおし、自らの社会のあるべき姿を考え、その実現に向けた教育を企画、実践することのできる教員になろうと目指す学生を増やすことにあります。今後とも、こうしたプロジェクトを実施していくことが、教員養成において、本学部においてさらに学生が教員として貢献していく地域にとっても不可欠なものと考えます。

(文責: 初等教育開発講座 熊丸 真太郎)